

緑地新聞

8

2019年3月発行

ボランティアプログラム集大成



二月十五日(金)、竹林の整備と今年度の活動を振り返る「事後学習」を行った。午前中は、三グループに分かれ、ひたすら竹を切り倒した。何度やっても竹を倒していく時の爽快感は良い。一年を通してのプログラムも終盤となり、皆、だいぶ技術も身に付いてきたと思っていたが、枝木を切るのには苦労した。だが、

連携団体『ひなた緑地遊学会』の北出さんは、枝木を一発でどんどん切っており、熟練の技を感じた。コツは枝木を引っ張り、のこぎりの根本からスツ、と切るのだと教わった。また、今回、竹を切る中で面白いものを発見した。ポツチヤマである！（右図参照）ポツチヤマとは私たちの世代なら誰もが見つけているポケモンだ。誰がどうやって描き刻んだものか全くわからない。ミステリーである。

午後は、「事後学習」を行った。近隣小学校のコーディネーターの方や施設課の方、アドバイザーである加藤英寿先生、スポーツボランティアプログラムのリーダー学生等、多くの方々に来てくださった。「事後学習」では、活動の効果やプログラムを通じての自分の変化について考えた。多様な視点から活動を振り返ることで、自分が思っていた以上に



←少しづつ、でも確実に緑地が明るくなってきました

多方面で活動の成果があることが分かった。特に、竹水鉄砲を使った「サル山水合戦」では、保護者の大人が大学生とハイタッチしてはしゃぐくらいまで真剣に楽しんでくれていたというのを聞いて、驚いた。大人も子どもも真剣に取り組める機会を提供できるというのは、すごく良いなと思った。

次年度の活動に向けた改善案も出し合ったので、このボランティアプログラムはさらによりよいものへと進化していくだろう。
(作業療法学科・一年・M)

プログラムを終えて... ～学生の声～

- これまで大学周辺についてのことをあまり深く知りませんでしたが、水鉄砲合戦や木工体験会を通じて、大学と周辺地域との関わりを感じることができました。また、地域との繋がりに自らの学部での専門知識が活かしたら、と思います。
- 交流を通じ、世代による考え方の違いを感じることで、高齢化や地域交流について、考えていく上で必要となる様々な視点をもてるようになったと思います。
- 活動でのやり取りや企画における話し合いの中で、目的を達成させるためには優先順位を考慮してしっかりと計画をしなければいけない、と感じました。
- 水鉄砲や木工工作といった利活用から、竹の無限の可能性を感じました。
- どうしても竹を上手く切れない回があり、改めて自然と向き合い、そして整備をしていくことの難しさを肌で感じました。
- 人の手入れが無くなることで、山にいる生物の多様性が損なわれてしまったり、竹が木々に必要な日光を遮ることで森の基盤が弱体化してしまう、といった里山が抱える課題について深く知ることができました。



緑地川柳

見上げれば
竹の隙間に
日向咲く

編集後記(物理・二年一)
活動に関わった人、皆で活動の効果を考えることは重要だなと思いました。特にサル山水合戦については楽しかったのは良かったのですが、果たしてそれが地域のニーズに沿ったものなのかということが何となく疑問でした。事後学習で小学校の方にありがたかったということをおっしゃっていたのでその活動の効果を実感することができました。

編集発行

文章担当

首都大学東京ボランティアセンター (南大沢キャンパス 一号館一階)
電話 〇四二-六七七-一三五四 メール hu-volunteer@ujimu.ac.jp
地域ボランティアプログラム①「松木日向緑地プログラム」メンバー 健康福祉学部一年・M